

(肝属郡高山町野崎字東田)

位置と環境

遺跡は肝属川と串良川が合流する肥沃な三角州が形成された沖積平野の水田地帯に立地し、国見山地から延びた丘陵袖部に挟まれた標高約 5 m の微高地に位置している。本遺跡の西約 2 km には塚崎古墳群、対岸には唐仁古墳群が位置する。

調査の経緯

本遺跡は、平成 5（1993）年県教育委員会が県道高山～吾平線整備事業に伴って発掘調査を実施した。調査の発端は、工事中発見によるもので、調査直前是一部遺物包含層まで掘削工事が進んでいた。調査面積は1,200㎡である。当調査区の西側は平成 4 年度に発掘調査が実施されている。

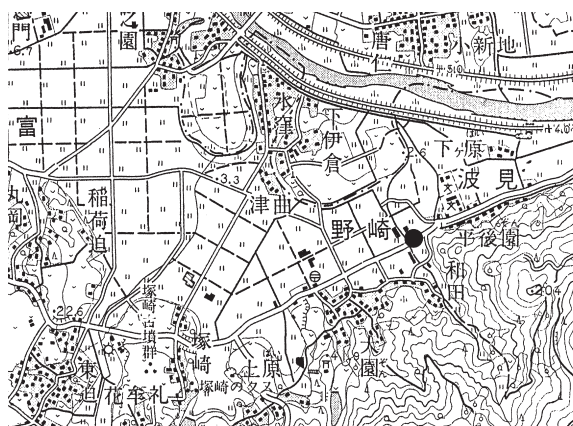
遺構と遺物

調査の結果、地表面から約 2 m 下の砂層から、古墳時代の竪穴住居跡群が発見され、微高地に立地する集落跡であることが判明した。また、縄文時代晩期の竪穴住居跡や弥生後期の方形周溝も発見された。

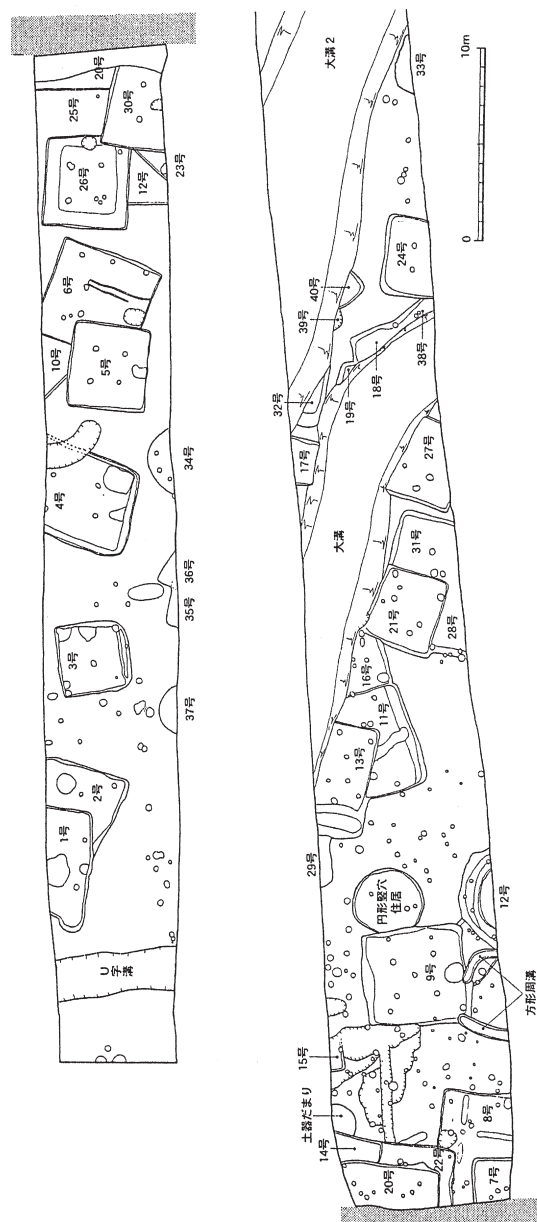
縄文時代後期末の竪穴住居跡（第2図）は、長径3.5m、短径3.2m、深さ13cmの円形竪穴住居跡である。柱穴は径20cm、深さ10cmの柱穴が2基施される。また、住居の床面中央には30cm余りの範囲に焼土が検出された。住居内からは縄文後期末の中岳式土器の深鉢・浅鉢形土器や打製石斧が出土した。その他、縄文後期末～晩期末の市来式土器や刻目突帯文土器や打製石包丁、打製石鎌、打製石斧、石垂等の石器が出土した。

弥生時代の遺構は、調査区の西側端に弥生後期のU字溝とほぼ中央部に外径が約4.5m、幅約60cm、深さ約35cmの後期末の方形周溝が発見されたが、主体部は調査区外に延び、詳細は不明である。周溝内からは壺形土器や鉢形土器、蓋形土器等が出土した。

古墳時代は、本遺跡の主体となるもので、調査区の範囲ほぼ全域に竪穴住居跡40軒をはじめ土坑や土器溜まり等の遺構が発見された古墳時代の大集落跡である。古墳時代の遺物包含層は暗茶褐色の砂層で、遺構は下層の濁白色砂層を掘り込んでいる。40軒の



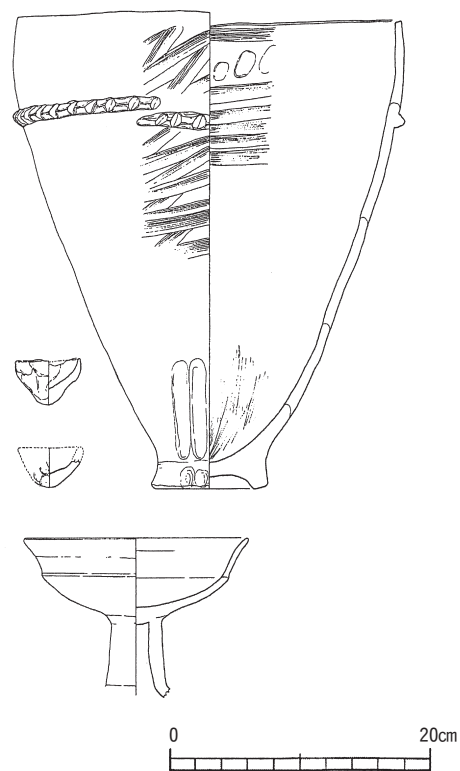
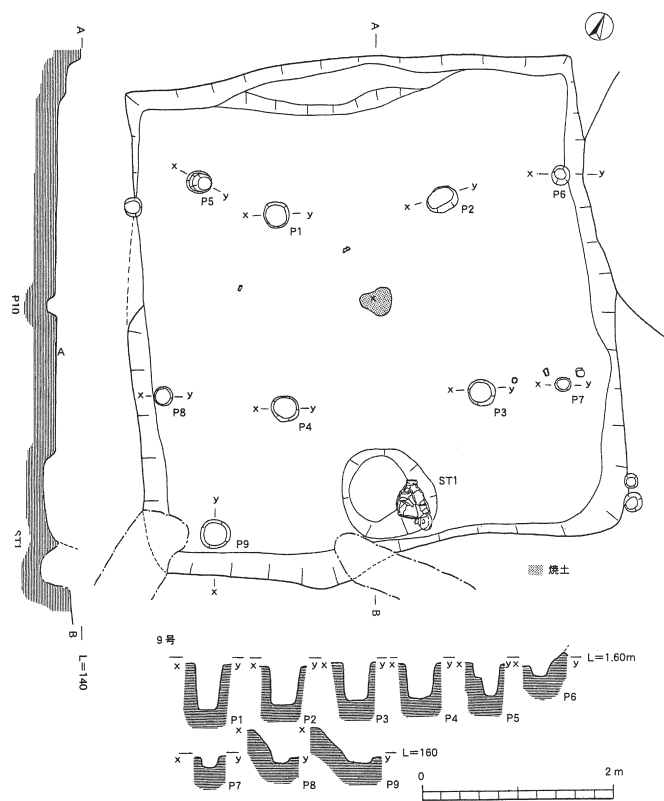
第1図 東田遺跡の位置



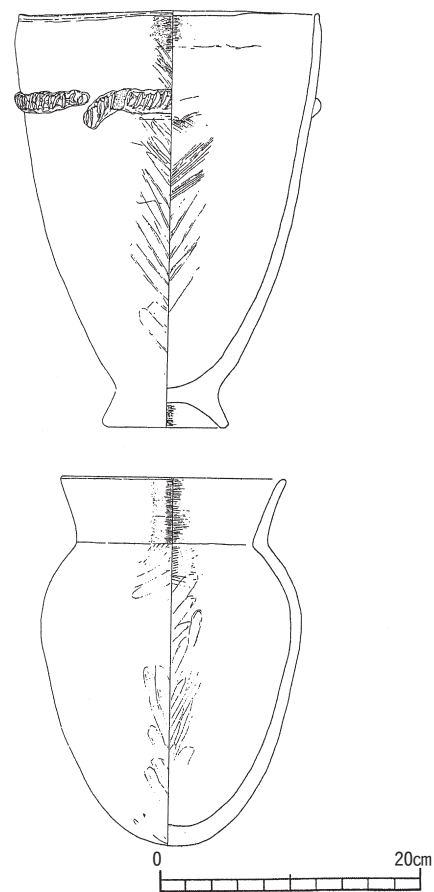
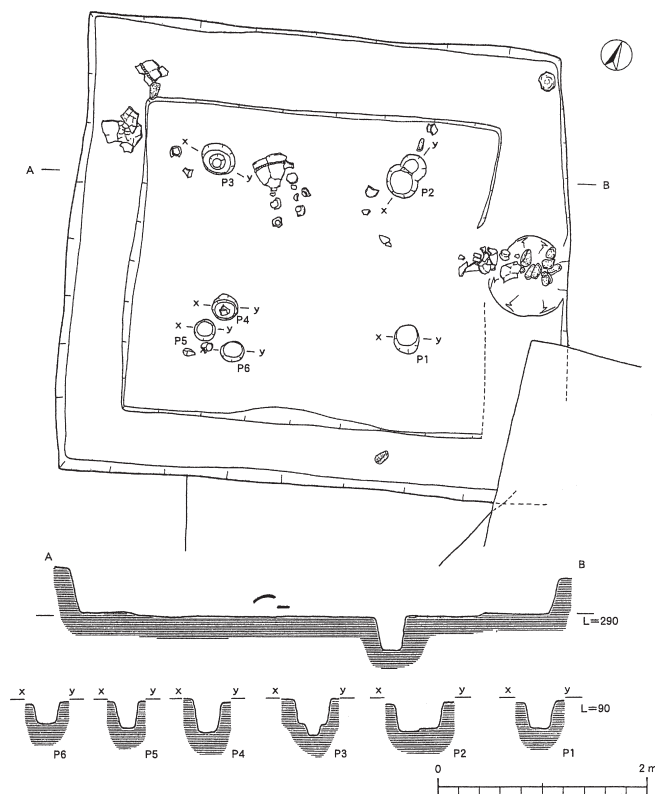
第2図 遺構配置図



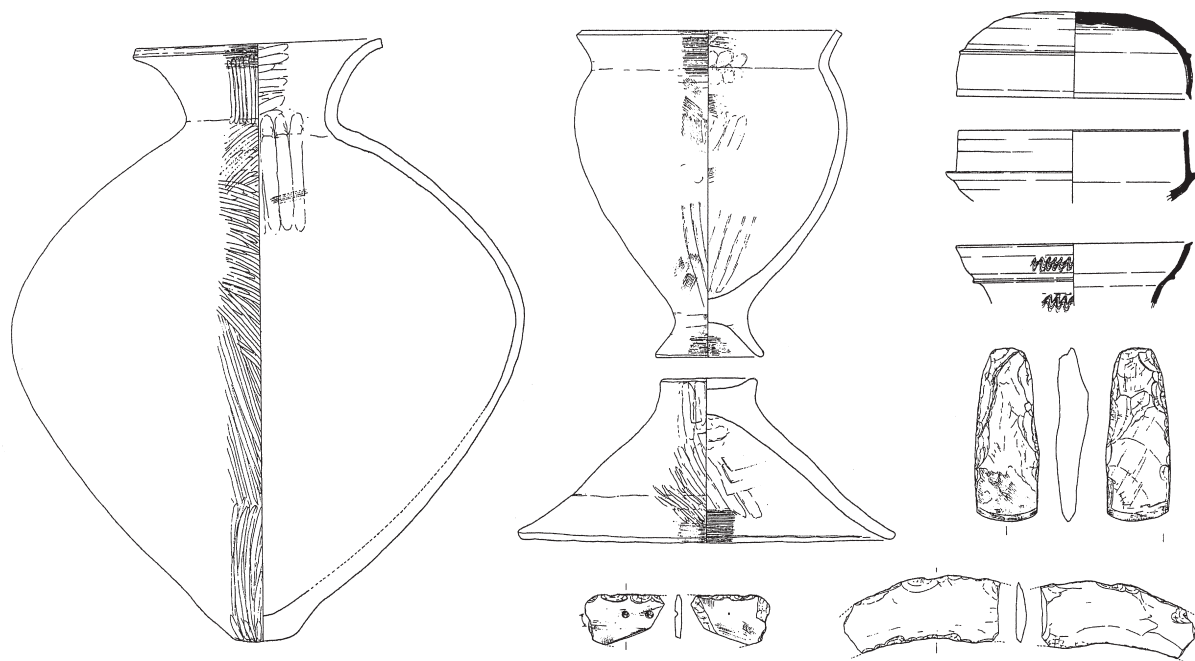
写真 1 竪穴住居跡群



第3図 9号竪穴住居跡と出土遺物



第4図 26号住居跡と出土遺物



第5図 出土遺物

竪穴住居跡は12号・34号・37号の円形住居を除いたほかは方形住居である。大半の住居は住居同士が切り合い関係にあることや、また、溝や調査区外に広がっていることから全体像は把握できなかった。この中であって象徴的な26号竪穴住居跡は、4本柱を持つ保存状態が良好な住居である。縦4.8m、横4.4mの略方形を呈し、深さは56cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、4面の壁際には段を有し、東側壁中央部に径80cm、深さ20cmの円形土坑を持ち、木炭や焼土が検出された。住居内からは甕形土器、壺形土器、高坏、埴、須恵器がセットで出土した。出土遺物には、成川式土器の甕形土器・壺形土器・高坏・須恵器（蓋・身、坏、埴-陶邑Ⅰ～Ⅱ段階）などがあり、5～6世紀に位置づけされる。

特徴

本遺跡は調査区外にも広がる古墳時代中頃の大集落跡である。住居は大部分が重複関係にあり、当地を住居地として使用した期間や同時性等の課題があるが、住居の切り合い関係や位置関係、住居の方向などから大まかに3つのパターンが考えられる。一つ目は1号・5号・8号・27号・30号竪穴住居跡、2つ目は2号・4号・6号・14号・18号・21号・22号・25号・28号・31号竪穴住居跡3つ目は3号・11号竪穴住居跡があげられる。また、住居内の出土遺物からは土器形式による時期差の幅は無く、沖積平

野の低湿地、標高2mの微高地の低地に立地すること、地形的に制約された条件の中での集落地であり、長期間集落として存続しえなかったと思われる、集落の時期は5～6世紀に比定される。なお、集落域の範囲については、住居跡の件数、分布、密集度、切り合い関係、地形状況から、幅は東西約150m、南北にはさらに拡大した大集落からなるものと推定される。古墳時代になると遺跡は急激に増加する。大規模な遺跡として知られる辻堂遺跡や萩原遺跡、成岡遺跡など、大半の遺跡は丘陵や台地に立地している。本遺跡の古墳時代の低地における立地条件、環境、集落のありように低地の微高地に形成された集落跡の遺跡は少なく同時期の遺跡としては鹿大構内遺跡がある。一方、集落の構成、場所の選定、稲作との関係、さらに隣接する塚崎古墳との関係等、課題となった。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター1996「東田遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』16

(青崎和憲)